

353

660

佐藤正範著

用上級
新日本文法教授提要

東京 山海堂出版部

K221.82

13

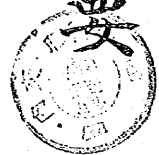
K221.82

13

佐藤正範著

上級用

新日本文法教授提要



東京 山海堂出版部

緒言

一 ^{上級}新日本文法は中學校教授要目に準據して、中學校に於ける上級用の國文法教科書として著作した。又本書は該書を教授する要法を提出叙説した。

二 ^{上級}新日本文法は中學校教授要目の趣旨に基づき、國文法の全事項を組織的に整理し、文の構成に對する一般の智識を授けむことを期し、先づ總説より始めて音韻及び文字の大要を説き、次に品詞に入り、慣用變遷の順序に従ひ、文語より口語に進み、類推的對照的に文語と口語との異同を知らしめ、よく品詞の用法及び文章の作法等に練熟せしめ、實際日常使用の際に自在に適用せしめ、又よく他人の文章を正解せしめむことを期した。又本書はその主義を貫徹する要法を説明した。

三 ^{上級}新日本文法は中學校生徒の學力の程度を考へ、煩瑣なる理論を避け、極めて平易簡明に説き、實用的を主とし、成るべく歸納的開發的に記述して、生徒

の興味を喚起せむことに勉め、且國語の特色を理解せしめ、國語愛護の精神を養はむことに意を用ひた。又本書はその理想を實現する要法を記述した。

四 上級新日本文法は教材の分量及び按排に最も意を用ひ、生徒をして一局部に偏せず國文法の全般に通達せしめむことを期し、全般の材料を理解し易く、教授し終へるやうに工夫酌量した。又本書はその豫期の如く進行する要法を説明した。

五 上級新日本文法は特に例題並に練習問題の材料の選擇に留意し、その材料を成るべく中學校用の國語讀本の程度のもの、及び日常一般に使用する實用的修養的趣味的のものを採り、又成るべく前後の連絡を保ち、生徒の應用の才を養ひ、生徒をして始終愉快に學習せしむことに力を用ひた。又本書はその例題並に練習問題を實地に教授する要法を記述し、問題は全部の解答法を擧げて説明した。以上の要法に據らば、生徒が始終進んで愉快に學習するであらう。

上級 新日本文法 目次

第一篇 總說	一頁	第三章 音韻の總括	七
一 言語 文字 文	一	第一篇 文字	八
二 國語 國文	一	第一章 假名	八
三 口語 文語	二	第二章 漢字	八
四 文法	三	第三章 文字の總括	九
五 單語 品詞	四	第四篇 品詞	一〇
六 主語 述語	五	第一章 名詞	一〇
七 文法説明の順序	五	第一節 總說	一〇
第二篇 音韻	六	第二節 名詞の種類	一〇
第一章 音韻の種類	六	第三節 名詞の總括	一〇
一 母韻 父音 子音	六	第二章 數詞	一〇
二 撥音 促音	六	第三章 代名詞	一一
三 拗音 長音	六	第一節 總說	一一
第二章 音韻の變化	六	第二節 代名詞の種類	一一
一 通言 約音	七	第三節 名詞の總括	一一
二 略音 延音	七	第四章 動詞	一二
三 添音 音便	七	第一節 總說	一二
		第二節 文語動詞の活用	一二
		第三節 文語動詞の活用形	一二
		一 未然形 二 連用形 三 終止形	一二

四 連體形	五 已然形	六 命令形	三
第一 正格活用	二 上二段活用	三 下二段活用	三
四 上二段活用	五 下一段活用		三
第二 變格活用	一 か行變格活用	二 さ行變格活用	三
三 ない行變格活用	四 ら行變格活用		三
第三 文語動詞活用形の總括			三
第四節 口語動詞の活用形			四
一 口語四段活用	二 口語上一段活用		四
三 口語下一段活用	四 口語か行變格活用		四
五 口語さ行變格活用			四
第五節 動詞の自他			七
第六節 動詞の音便			八
第七節 動詞語尾の假名遣			九
第八節 動詞の總括			九
第五章 形容詞			九
第一節 總 說			九
第二節 文語形容詞の活用			九
第三節 文語形容詞の活用形			九
一 活用	二 しく活用		九
第四節 口語形容詞の活用			九
第五節 形容詞の音便			九
第六節 推量の助動詞			九
第七節 指定の助動詞			九
第八節 詠歎の助動詞			九
第九節 打消の助動詞			九
一〇 希望の助動詞			九
一一 比喩の助動詞			九
一二 完了の助動詞			九
一三 未來の助動詞			九
一四 過去の助動詞			九
一五 受身の助動詞			九
一六 受身の助動詞			九

二 口語可能の助動詞	六
三 口語自發の助動詞	六
四 口語使役の助動詞	六
五 口語尊敬の助動詞	六
六 口語時の助動詞	六
七 口語推量の助動詞	六
八 口語指定の助動詞	六
九 口語打消の助動詞	六
一〇 口語希望の助動詞	六
一一 口語比喩の助動詞	六
一二 口語完了の助動詞	六
一三 口語未來の助動詞	六
一四 口語過去の助動詞	六
一五 口語受身の助動詞	六
一六 口語受身の助動詞	六
第七章 助 詞	六
第一節 總 說	六
第二節 助詞の種類	六
第一類 名詞・數詞・代名詞に添ふ助詞	六
第二類 動詞・形容詞・助動詞に添ふ助詞	六
第三類 種々の品詞に添ふ助詞	六
第三節 助詞の總括	六
第八章 副 詞	六
第一節 總 說	六
第二節 副詞の種類	六
第九章 接 續 詞	六
第一節 總 說	六
第二節 接續詞の種類	六
第十章 感 動 詞	六
第十一章 品詞の轉成	六
第十二章 頭尾語	六
第一類 接頭語	六
第二類 接尾語	六
第五篇 文 章	六
第一章 文の成分	六
第一節 主語 述語	六
第二節 客語 補語	六
第三節 修飾語	六
第四節 文 主	六
第五節 獨立語	六
第二章 文の成分の位置	六
第一類 文の正叙法	六
第二類 文の倒叙法	六
第三類 文の略叙法	六
第三章 文の句及び節	六
第一節 文の句	六

第二節 文の節	天
第四章 文の係結	天
第一類 ゴ・なむ・や・かの係結	元
第二類 この係結	元
第五章 文の呼應	元
第六章 文の構造上の種類	四
第一類 單文	四
第二類 複文	四

第三類 重文	四
第七章 文の性質上の種類	四
第一類 平叙文	四
第二類 疑問文	四
第三類 命令文	四
第四類 感歎文	四
第八章 文章の總括	四

目次終

上級 新日本文法教授提要

佐藤正範 著

第一篇 總說

○目的 第一篇の總説は、國文法の全體に亘つて、總括的説明をなし、次に順序として第二篇以下は、音韻・文字を説き、品詞の説明を與へ、漸次文章に關する説明に進むが目的である。

一 言語 文字 文

(一)目的 總説として最初に「言語」「文字」「文」の性質及び意義を説明して、その概念を與へるが本項の目的である。
 (二)言語 人の思想を發表する方法は、身振とか顔附とか目附とか音楽とか繪畫とか種々あるが、先づ人の音聲に依つて思想を表すがその主なるもので、之を言語といふのである。但し厳密にいへば、調節ある音聲で、規律ある思想を表すものであるが、概括的に左の如くに説明するが適當である。
 (三)文字 音聲に依る言語は、發聲者の口より聽者の耳に傳へ、一時的のもので、その傳達する範圍も、遠隔の地に、又大多數の人に傳達することが出来ないから、之を文字で發表する

必要が起る。文字に書き表されては、前記の遺憾もなく、永久に保存される効果があるから、言語をば文字を用ひて書き表す必要が起るのである。故に、
 言語を書き表す符號を文字といふ。

(四)文(文章) 前述の如く、人の思想を表すには、言語又は文字を用ひるのであるが、その言語又は文字を用ひるとしても、規律的に統制的に表さなければ、人の一つの纏つた思想を表すことが出来ない。故に之を規律的に統制的に表す必要がある。故に、
 言語又は文字を用ひて、一つの纏つた思想を表したものを文又は文章といふ。

(五)要項 以上の如くに、國文法に對する正確な智識を與へるには、最初に言語・文字・文即ち文章の性質を説明するが肝要である。

二 國語 國文

(一)目的 前項に次いで、國語と國文との性質及び意義を説明して、一般的常用語の概念を與へるが本項の目的である。
 (二)國語 一般的にいへば、世界各國には、何れの國にも、皆

それ／＼の言語があつて、それをその國の國語といふ。
 (三)國文 文章も世界の各國それ／＼特殊のものがあつて、それをその國の國文といふのである。
 (四)概括 前項に従つて、日本語は即ち我が日本國の國語であり、日本文は即ち我が日本國の國文であるといへる。
 (五)國語科 中等學校の學科中に「國語科」とあるのは、範圍を汎くいつたもので、國文をも通じて國語を知るから、つまり「國語」「國文」を總括した名稱である。

三 口語 文語

(一)目的 前項に次いで、口語と文語との性質及び意義を説明して、一般的常用語の眞義を説くが本項の目的である。
 (二)口語 正確にいへば、我が國の口語と文語との區別は、曖昧な點もあるが、何れの國でも言語と文章とは元來同一のものであつて、我が國では、古來慣用し來つた言語も多くあるが、又古來段々變遷し、文語と口語と相異なつてゐるものも多くあつて、文語と口語とはその形式や用法の相異なつてゐるものが澤山ある。要するに、口語はその時代々々に適應するやうに修正され變遷して、現今では我が國民一般に行はれる一種の慣用語となつたもので、又一種の言語の發達といはねばならぬ。故に我が國では、
 我が國民の談話に用ひる言語を我が國の口語といふ。

(三)文語 我が國現今の國語は、歴史的にいへば、上古より傳來し、奈良朝・平安朝以來の文章に用ひられた系統を受けて、歴史的に尊重せねばならないから、今日尙存在して、思想發表の好機關に供せられてゐる。故に我が國では、
 我が國民の文章に用ひる言語を我が國の文語といふ。
 (四)要項 前記の如く廣義にいへば、口語文に用ひられる言語をも文語といふことも出来るやうであるが、併し現今我が國では、通常前記の如く、文語を用ひた文章を國文といつてゐる。

(五)概括 前事項を概括すれば、左の通りである。

我が國では文章に用ひる語と、談話に用ひる語と、一致してゐるものもあるが、その大部分は上古より種々變遷して、現今餘程その形式用法が違ふのである。それが文語と口語とある譯である。
 (一)口語 談話にばかり用ひて、文章に用ひないものを「口語」といふ。例へば、「櫻は我が國の澤山の花の中でも、一番に美しい。それであるから誰でも之を愛するのである。」といふ發表法は、口語でいつたものであるが、近來は文章にも、多くこのやうな發表法を用ひるやうになつたが、元來は口語に用ひて、文章に用ひないのであつたから、この發表法を口語法といふのである。
 (二)文語 文章にばかり書く語で、談話に用ひないものを

「文語」といふ。例へば、「櫻は我が國の百花の王なり。誰か之を愛せざらむ」と、文章に書くことがあつても、談話にはこのまゝには用ひない。この發表法を文語法といふのである。

四 文法

(一)目的 文法を學ぶ必要の趣旨を正確に理解せしめるが、本項の目的である。
 (二)文法 文法は何故に必要であるか。文法を教授するには、その必要を最もよく理解せしめなければならぬ。前記の口語及び文語を表すには、それ／＼一定の法則があつて、その法則を文法といふのである。例へば、「日輝く」といふ文は最も單純なものであるが、實際日常使用する文は、極めて複雑なものであるから、一定の法則に據らなくては、その文を正しく發表することが出来ない。之を知るには、文法を學ぶより外に方法がない。尙左に文法の性質を概説すれば、
 文を正しく作る方法を文法といふ。換言すれば、文法は吾人が口語又は文語を用ひて、綴つた思想を正しく發表する方法である。さうして我が日本人は、日本國の口語文語を正しく發表する方法を知る必要があつて、その方法を略して國文法といふのである。
 更に國文法の必要を詳説すれば、

(一) 我が國の口語又は文語を用ひて、正しい文即ち正しい文章を作るために、
 (二) 他人の作つた文章や詩歌を正しく解釋し、正しく悟得するために、
 (三) 對照的研究を試みて、外國語を正しく解釋し、正しく悟得するために、
 (四) 談話や演説の事項を正しく發表して、聽者をして正しく聞き取らせるために、
 (五) 日常の實用的事項を正しく發表して、見聞者をして誤解せしめぬために。
 此の如く苟も智識階級の日本國民としては、國文法を研究することが極めて必要である。殊に高等專門諸學校の入學受験者に取つては、國文法は試験科目中の一課目を成し、或は國文及び漢文の解釋、英文の國譯、その他何學科の答案でも、その發表法は、國文法を基礎としなければ、好成绩を得られないから、特別に研究の必要がある。
 (三)要項 高等專門諸學校入學受験者は、前條の「口語」と「文語」との區別を明瞭に知つてゐることが頗る肝要である。國文及び漢文の解釋でも、作文や文法や書取の答案でも、その問題には、或は口語を用ひることを條件とし、或は文語を用ひることを條件として、その要求の條件が判然と定められてゐる場合が多い。然るに、口語を用ひるものに文語を用ひ、

文語を用ひるものに口語を用ひては、大失點として成績の合格不合格に大關係を及すことになる。殊に口語と文語と混淆するものになつては、殆ど受験の資格がない、常識の缺乏者として取扱はれるのであるから、受験者は以上の「口語」と「文語」との區別を殊更判然と知り置かねばならぬ。是は單に國語科受験の場合のみに限らぬ。英語や數學や地理や歴史や何學科の場合でも同様である。

(四) 效果 智識階級の一般人に取つて國文法の重要なことは、前記の通りであるが、殊に高等專門諸學校入學試験では、國文の解釋や漢文の解釋や、文法・作文・書取といふ科目では、全然、國文法の法則を基礎としなければ、到底該科の好成绩を収めることの出来ないことは、今更論を俟たない。英文國譯や國文英譯や、數學の答案や、地理・歴史の答案や、その他何學科の答案でも、或程度まで發表上の成績の影響を受けることは勿論である。即ち國文法の智識の如何が、延いて入學の合格不合格の有力な原因となることが争はれぬ事實である。殊に高等專門諸學校の入學受験者に取つては、國文法は試験科目中の一課目を成し、或は國文及び漢文の解釋、英文の國譯、その他何學科の答案でも、その發表法は、國文法を基礎としなければ、好成绩を得られないから、特別に研究の必要がある。

五 單語 品詞

(一) 目的 文法の部分的説明に入る準備として、先づ單語や品詞の常用語を説明するが、本項の目的である。
(二) 單語 左の例の如く、傍線を引いてある一つの語は、皆意味を表してゐて、その一つの語を單語といふのである。

- (一) 勉強は幸福を生む母なり。
- (二) 日本は萬世一系の國體である。

(三) 品詞 以上の單語を便宜上、意義や形態や機能などより分類することが出来る。例へば、意義上から分類すれば、左記の如く、名詞以下十種となり、形態上から分類すれば、活用しない名詞・數詞・代名詞・助詞等と活用する動詞・形容詞・助動詞等との二種となり、職能上から分類すれば、文の題目となる名詞・數詞・代名詞、又文の叙述となる動詞・形容詞や、文の成分の修飾となる形容詞・副詞等となるのであるが、此等の分類法を總合して、意義や形態や機能などより左の十種に分類することが便宜である。その各の語を總稱して品詞といふ。

- (一) 名詞 (二) 數詞 (三) 代名詞 (四) 動詞 (五) 形容詞 (六) 助動詞 (七) 助詞 (八) 接續詞 (九) 副詞 (十) 感動詞
- (四) 文の成分 以上の品詞を集めて、一つの纏つた思想を表し

たものは、文即ち文章であつて、その品詞を文章組織の方面からは文の成分といふのである。文の成分の最も主なるものは主語及び述語であるから、次には主語及び述語の概要を説明するのである。

(五) 要項 以上の單語及び品詞の性質・意義等を説明する際に、左の觀念語及び形式語の用語を説明することも有益である。例へば、「勉強は幸福を生む母なり」との文についていへば、
(一) 觀念語 單語の中で、「勉強」「幸福」「生む」「母」など、獨立して完全な意味を持つてゐるもの、即ち獨立した觀念を持つてゐる單語を觀念語といふ。
(二) 形式語 單語の中で、「は」「を」「なり」など、獨立して意味を持たず、觀念語に附いて意味を整へるもの、即ち觀念語の形式を整へる單語を形式語といふ。

六 主語 述語

(一) 目的 文章を組織するための二大成分たる、主語及び述語の常用語の意義を説明するが、本項の目的である。
(二) 要項 左の例について、主語と述語とを説明するのである。

- (一) 田畑く。
- (二) 花が美しく。

右の例では、文中の叙述される語と、叙述する語との二種の

部分より成つてゐる。その叙述される語、即ち文章の主題となる語を主語といふ。又その叙述する語、即ち文章の主題に就いて叙述する語を述語又は説明語といふ。文章は何れもこの主語と述語との二要素を含まぬものはない。例へば、前記の如く、「田畑く」といへば、「日」はこの文の題目即ち主體であるから、之を主語といひ、「畑く」はその主語について叙述する語であるから、之を述語といひ、又説明語ともいふ。然るに「山の上に出た日」といへば、「日」だけの事をいつて、その日が「どうした」のか判らぬ。この類は長くても文とはいはれぬ。「何がどうした」とか、「何がどうである」とか、主として主語と述語とより成り、口語又は文語を用ひて、纏つた思想を表したものが文又は文章である。

七 文法説明の順序

(一) 目的 部分的説明の準備として、文法説明の順序を示し置くことが本項の目的である。
(二) 順序 文法を教授するに、比較的最も重要なものは、品詞と文章との部分であるが、それを説く前に、先づ言語の要素たる音韻及び言語を發表する文字に關する事項を説き、次いで品詞の部に入り、進んで文章の部に入つて説くが最も便宜であるから、以下その順序に説明するのである。

第一篇 音韻

第一章 音韻の種類

(一)目的 音韻の用例を擧げて、その種類を説く。
 (二)要項 人の口より發する音聲は甚だ多くあるが、その思想を表すに、調節あり規律あるものを、左の七種に分けることが出来る。

一 母韻 父音 子音

(一)母韻 あいりえおの五音は、單純な音で、諸音の韻ともなる。之を母韻といふ。

(二)父音 くつぬふむゆるうの九音より、各々の母韻を除いた發聲を父音といふ。我が國では、普通父音の文字を用ひなすが、羅馬字で書き表す「kx, su, tsu」の「k, s, ts」は父音である。

(三)子音 五十音圖の加行以下四十五音の、父音と母韻と合した音を子音といふ。

二 撥音 促音

(四)撥音 鼻腔を通つて出る撥ねる如き音を撥音といふ。撥音はん^ンの文字で表す。
 (五)促音 口内に促つて出る一種の音を促音といふ。促音はつ^ッの文字で表す。

三 拗音 長音

(六)拗音 きやきよきよ等の音の如く、二音連ねて一音に發する音を拗音といふ。
 (七)長音 ティブルポルト等の「i」の如く、音聲を長く引く音を長音といふ。

(三)練習 母韻・撥音・促音・拗音・長音を指摘せしめる。

(一)本問題は生徒の注意を喚起して、五種の音の區別を正確に知らせるために課するのである。以下類推せよ。

(二)前項に説明した事項の復習を試みて、記憶を正確に知らせるために課するのである。以下類推せよ。

(三)本問題は右旁に附記してある答を求めるのである。

(一) その形はまつたくコップ(洋盃)の如し。

(二) 酒類にはアルコール(酒精)分を含めり。

(三) 彼に問うて意見を聞いて行かん

(四) 私の言ひたいことを言つてよいか。

(五) 願つたり叶つたりとはこの事であらう。

第二章 音韻の變化

(一)目的 音韻の用例を擧げて、その變化する場合を説く。

(二)要項 音韻は言語を使用する際に、自然に變化するもので、その重なるものは左の六種である。

一 通音 約音

(一)通音 「きかけ」の「こかけ」と、「ひひけす」の「ひひけつ」となつた類の、或音が五十音圖の同行又は同列の音に通じて成つたものを通音といふ。

(二)約音 「さしあぐ」の「ささぐ」と、「ゆきぎえ」の「ゆきげ」と、「よくあれ」の「よかれ」となつた類の二音を一音に約したものを約音といふ。

二 略音 延音

(三)略音 「はちす」の「はす」と、「みづきは」の「みきは」と、「そとつ國」の「とつ國」となつた類の、或音を略したものを略音といふ。

(四)延音 「うつる」の「うつるふ」と、「つくる」の「つくるふ」と、「さふ」の「さはく」となつた類の、或音を延したものを延音といふ。

三 添音 音便

(五)添音 「むか(六日)」の「むいか」と、「やか(八日)」の「やうか」と、「四時」の「しじ」と、「すは」の「すんば」となつたものを添音といふ。

(六)音便 「開きて」の「開いて」と、「思ひて」の「思うて」

と、「立ちて」の「立つて」となつた類の、音聲を連呼する際、發音の便宜に因つて變化した音を音便といふ。この類の語はその數甚だ多し。

(三)備考 以上は文法上の用語として知つて置く必要がある。音便の書方については、正しく記すことが肝要である。又その或者は動詞・形容詞の音便でも説明する。

國文の解釋には、語の成立の原則を辨へる必要あつて、以上の六種音の語の、變化の法則を知り置くことは有益である。

第三章 音韻の總括

(一)目的 以上の音韻の事項を總括する便宜のために、音韻一覽表を擧げたのである。以下皆之に準じて、各事項を總括する方法を類推せよ。

(二)練習 左の文中の音韻の變化した種類は附記の通りである

○音韻一覽表 「教科書八頁」にあり。茲に之を省略す。

(一) みなそこに沈める珠をもたげたり。
 (二) 山のはの月を見つゝかたらへり。
 (三) ふづくゑの上のふはこよりふまきをとうでたり。
 (四) たなごころ(掌)を打つて喜んだ。
 (五) みづか(三日)に借りたあまぐ(雨具)をやうか(八日)に返した。

第三篇 文字

(一)目的 我が國で使用する文字の種類及び讀方等を説く。
 (二)要項 發音も言語も口より耳に傳へるのであるが、遠地に言ひ送り、後世に遺し、又種々の書類を認める場合は、文字を用ひて思想を發表するのであるから、先づ文字に關する一般の説明をするのである。我が國で現在一般に用ひてゐる文字は假名と漢字とである。

第一章 假名

(一)要項 我が國特有の文字は假名で、假名に片假名・平假名の別あり。之を一定の順序に排列したものは五十音圖である。その清音假名の外に濁音・半濁音・異體の假名がある。この五十音圖の形式は、文法の基本事項であるから、勿論詳記させて置かねばならぬ。
 (二)備考 假名遣法は、國語を記し、國文を解するに、甚だ重要な方法である。例へば、「S」(家)、「ひなか」(田舎)、「えび」(蝦)、「るみ」(笑)等、同發音の文字を異なる假名で書き分ける方法が必要で、之を國語假名遣法といふ。之を知り置くは實用上大に必要である。

第二章 漢字

○目的 漢字を正しく書く用例を擧げて、その要件を説く。
 一 字畫の區別
 漢字は一點一畫をも字畫を正しく書く必要のあるものがあつて、「快」を「快」と、「待」を「侍」と、「戒」を「戒」と、「門」を「問」と、「功」を「巧」と書いては用をなさないこととなる。
 二 類字の辨別
 漢字には類字も多くあるが、「己」「巳」「已」の區別、又「戊」「戌」「戍」「鳴」などの區別は、誤つては全然用をなさないことになる。

三 慣用文字の使用

我が國使用の漢字は、獨特の慣用文字があつて、「事柄」「天晴」「甲斐」「兎角」等の漢字は認められてゐるが、是も制限があつて、自己製の使用を認められぬ。

四 和字の使用

我が國には漢字に類する和字があつて、「畑」「畠」「辻」「峠」「鳴」「鳩」「風」「娘」「米突」「哩」「瓦」等は、使用を認められてゐる。是も慣用の例に據らねばならぬ。

○備考 正字と略字との辨別 漢字は正字を書くことが第一義で、「國」を「国」と、「邊」を「辺」と、「圍」を「開」と書く類の正字を略字で表すものは、或點まで認められること

もあるが、通用されぬ變體的の略字を用ひてならぬ。大體は正字を書くやうに注意し置くが肝要である。
 我が國使用の漢字は、三千字より五千字位もあつて、記憶の困難もあるが、一般の通用の文字をば、正しく書くことに注意し置くが肝要である。
 我が國で漢字を使用するには、音讀・訓讀の區別がある。その例は左の通りである。

吳音	京經	行人	經文	明日	人間
漢音	京城	行程	經書	明月	人物
唐音	北京	行燈	看經	明	杜撰
訓讀	京城	行程	經月	人物	
	北燈	看	明	撰	

○備考 漢字を讀み又使用するには、一々その慣例に據らねばならぬ。尤も吳音・漢音・唐音一致の文字も多数ある。
 ○送假名法 以上の如く、漢字を訓讀するもの下に、假名を送つて識別する方法を送假名法といふのである。

第三章 文字の總括

○練習 左の片假名附は音讀・平假名附は訓讀である。

- (一) 伊勢(イセ)の神宮(カミヤ)は尊嚴(ソウエン)なる寺院(ジエン)あり。
- (二) 京都(キョウト)には莊嚴(ソウエン)なる寺院(ジエン)多し。
- (三) 西行法師(さいぎょうぼうし)は行脚(ぎやく)の行動(こうどう)を成(な)したり。
- (四) 經書(きやうしよ)と經文(きやうぶん)とは讀法(よみかた)が違(ちが)ふ。
- (五) 萬(マン)が一(イツ)にも殿(テン)上(ジョウ)人(ひと)であるまいかと思(おも)つた。

第四篇 品詞

- (一)目的 十種の品詞の意義及び性質用法等を説く。
- (二)種類 文を組み立てるものは單語で、單語をその意義や性質や職分などから分類したものは品詞であるが、その品詞を分類するには、學者の意見に多少の異同はあるが、一般には十種に分類することが普通であつて、本書はその十種を順次に説明するのである。

第一章 名詞

第一節 總説

- (一)目的 名詞の用例を擧げて、その定義を説く。
- (二)要項 英文法では名詞を固有名詞・普通名詞・集合名詞・物質名詞・抽象名詞などと分類して、それ／＼その必要があるが、我が國の文法では、そのやうに分類する必要がないから、主として固有名詞・普通名詞を標準として説明するが便宜である。

第二節 名詞の種類

- (一)要項 名詞はその數甚だ多く、數へ切れぬ程澤山あるが、固有名詞と普通名詞との二種類あることを知らせる目的である。「固有名詞」は固より特有する名詞の義で、或一つの事物に限つて用ひられる名詞をいふ。又「普通名詞」は普く逆

じて用ひられる名詞の義で、同種類の事物には、何の事情や何の物質にでも、共通に用ひられる名詞である。

- (二)備考 固有名詞と普通名詞との區別を説くことは、文法上の職分として必要である。これは常識上にも必要であるから、簡単に説明して置く方が有益である。現に行はれてゐる文法書に、この種類を説いてゐないものもあるやうであるが、著者は之を教へることが必要であると思つて記述したのである。

第三節 總括

- 練習 文中の「」は普通名詞、「」は固有名詞である。
伊勢の太廟は天照大神を祭れる神宮なり。
進みゆく昭和の御代に生れたるは至幸至福なり。
吉野山、御の奥は知らねども、見ゆる限は櫻なりけり。
我が日本は歐米諸國にも類のない國體を有してゐる。
土佐日記は紀貫之の記した紀行の書である。

第二章 數詞

- (一)目的 數詞の用例を擧げて、その定義を説く。
- (二)要項 數詞は事物の數量や順序を表すものである。この數詞は名詞と類似のもので、或は名詞として説明してゐるものもあるが、どうかといへば、教授の便宜上、又國文法の整理上、名詞より切り離して、別に一つの品詞として教へる方が

便宜であると思ふ。

- (三)練習 文中の「」を引いたものは數詞である。

- (一) 我が國は三千年の光輝ある歴史を有し、世界五大國の「」に數へらる。
- (二) 彼は指を屈して、「とを、はたち、みそちと數へたり。五月の二日又は三日を八十八夜といふ。立春より八十八日目の意なり。
- (四) 第一師團は三月二十五日午前八時に下關を出發した。
- (五) 五十鈴川の水は千代に八千代に漕りかである。

第三章 代名詞

第一節 總説

- (一)目的 代名詞の用例を擧げて、その定義を説く。
- (二)要項 代名詞は名詞の代りに用ひられる詞で、多くは同一の名詞の繰出す時に、その煩を省くために用ひられる詞である。例へば、「彼」とか「汝」とかいふのは、それ／＼その人の氏名があつて、その氏名の代りに簡便に用ひる詞である。

第二節 代名詞の種類

- (一)要項 代名詞もその數は随分多いが、普通には「人代名詞」と「指示代名詞」との二種類に分けて説明するのである。又人代名詞を自稱即ち第一人稱、對稱即ち第二人稱、他稱即ち第三人稱、及び不定稱の區別を立てて説明することが實用上必

要である。又指示代名詞を近稱・中稱・遠稱及び不定稱と分けて説明することも實用上必要である。

- (二)體言 名詞・數詞・代名詞は文の主位となり、題目となる本體を表す語であるから體言といひ、文法上この語を用ひて便宜の場合があるから、この際に説明するが必要である。
- (三)備考 人代名詞の稱別、指示代名詞の稱別は、國文を解釋し、文章を作るに、知らなければならぬ要件である。之を見誤り、用ひ誤つては、大なる錯誤を生ずるのである。

第三節 代名詞の總括

- 練習 文中の「」は人代名詞、「」は指示代名詞である。
その説を聞くもの、いづれも彼の博學に驚歎せり。
この山のあなたに、よき風景あれば、其處に案内せむ。
諸君はいづれの方法を如何に實行せむとするか。
それはそこに、あれはこゝに、だれか持つて來なさい。
彼は何處の誰であるか、私はそれを知りません。

第四章 動詞

- (一)目的 動詞の活用する方法や種類や用法等を説く。
- (二)要項 名詞・數詞・代名詞は固定した語形で、その形態を變へないのであるが、動詞・形容詞・助動詞は、その形態を變へて用ひるので即ち活用するものである。此等の品詞は我が國の文法上最も複雑で、又必要の多いものであるから、

之を明瞭に説明して、會得せしめることが實に肝要である。

第一節 總説

○目的 動詞の用例を挙げて、その定義を説く。

第二節 文語動詞の活用

○目的 動詞の活用に關して、左の諸項を説く。

- (一)活用語の用例。(二)語根又語幹。(三)語尾。(四)動詞の活用又動詞のはたらき。(五)用言。

第三節 文語動詞の活用形

- (一)目的 文語動詞の活用形の例を挙げて、その種類を説く。
- (二)要項 文語動詞の活用形の種類を説いて、その語形の順序をすらすらといへるやうに導くことが肝要である。

- (一)未然形 (二)連用形 (三)終止形 (四)連體形 (五)已然形 (六)命令形

右の如き活用形の方面より、動詞を正格活用の五種と、變格活用の四種とに分類して、左の如く説明する。

第一 正格活用

一 四段活用 「四段活用」の語は左の六行に活用する。又何活用でも「未然」「連用」「終止」「連體」「已然」「命令」の六種の活用形あることを知らしめるが肝要である。故に原書「三二頁」にその「活用表」を挙げ、又その卷末に「活用對照表」を添へたのである。

○四段活用の例

- (一)か行四段活用 明く 仰ぐ 動く 開く 驚く 輝く 乾く 繋ぐ 赴く 導く
 - (二)さ行四段活用 致す 貸す 推す 促す 消す 盡す 志す 催す 果す 殘す
 - (三)た行四段活用 分つ 立つ 勝つ 打つ 持つ 待つ 保つ 放つ 滿つ 過つ
 - (四)は行四段活用 誘ふ 逢ふ 扱ふ 言ふ 習ふ 厭ふ 祝ふ 買ふ 通ふ 歌ふ
 - (五)ま行四段活用 歩む 頼む 勇む 營む 閉む 澄む 進む 頼む 樂む 勵む
 - (六)ら行四段活用 當る 至る 入る 祈る 賣る 贈る 刈る 限る 語る 歸る
- 注意 四段活用の語は動詞中最も多いのである。
- 二 上二段活用 「上二段活用」の語は左の六行に活用する。
 - (一)か行上二段活用 起く 生く 過ぐ 盡く
 - (二)た行上二段活用 落つ 怖づ 朽つ 綴づ 閉づ 恥づ
 - (三)は行上二段活用 強ふ 生ふ 用ふ 延ぶ 陸ぶ 佗ぶ
 - (四)ま行上二段活用 恨む 試む
 - (五)や行上二段活用 報ゆ 老ゆ 悔ゆ
 - (六)ら行上二段活用 怒る 下る 舊る
- 三 下二段活用 「下二段活用」の語は左の十行即ち五十音圖各行に活用する。

○下二段活用の例

- (一)あ行下二段活用 得 心得
- (二)か行下二段活用 明く 懸く 避く 食く 解く 開く 擧ぐ 投ぐ
- (三)さ行下二段活用 寄す 載す 合す 見す 馳す 任す 交す 寄す
- (四)た行下二段活用 當つ 立つ 滿つ 企つ 育つ 撫づ 秀づ 隔つ
- (五)な行下二段活用 重ぬ 尋ぬ 束ぬ 連ぬ 委ぬ 寢ぬ 兼ぬ 撥ぬ
- (六)は行下二段活用 與ふ 誂ふ 抑ふ 替ふ 數ふ 堪ふ 考ふ 誂ふ
- (七)ま行下二段活用 祟む 慰む 改む 諫む 定む 極む 清む 慰む
- (八)や行下二段活用 消ゆ 開ゆ 肥ゆ 越ゆ 燃ゆ 冷ゆ 費ゆ 覺ゆ
- (九)ら行下二段活用 溢る 入る 生る 流る 晴る 優る 別る 後る
- (一〇)わ行下二段活用 植う 飢う 据う
- 四 上一段活用 「上一段活用」の語は左の六行に活用する。
- (一)か行上一段活用 着る
- (二)な行上一段活用 煮る 似る

(三)は行上一段活用

- (三)は行上一段活用 干る 籤る 噓る
- (四)ま行上一段活用 見る 鑑みる
- (五)や行上一段活用 射る 鑄る
- (六)わ行上一段活用 居る 率る 率める 用ふる
- 五 下一段活用 「下一段活用」の語は左の一語のみである。
- か行下一段活用 蹴る
- 練習 文中の―は動詞、附記はその活用の名である。
- (一)塵を積れば山となる。 (か行下二)
- (二)恩を受けては必ず報いよ。 (か行下二)
- (三)身を立て道を行ひ、名を後世に揚ぐべし。 (か行下二)
- (四)後に山を顧み、前に川を眺めて、平原に出でたり。 (ま行上二)
- (五)雪降りて年の暮れぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ。 (ま行下二)
- 第二 變格活用
- 一 か行變格活用 「か行變格活用」の語は左の一語のみである。
- 來
- 二 さ行變格活用 「さ行變格活用」の語は左の通りである。
- 爲 在す 噂す(名詞より) 旅す(名詞より) 感ず

○備考 さ行變格活用は「爲」と「在す」とのみであるが、前記の例の如く、名詞を動詞にして活かせ、又漢語を活用させるものは、この活用にするのである。

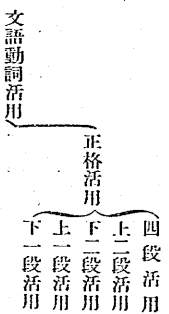
三 なる行變格活用 「なる行變格活用」の語は左の二語のみである。

- 死ぬ 往ぬ
- 有り 居り 侍り

第三 文語動詞活用形の總括

(一)目的 以上説明した文語動詞活用の種類を總括し、又その活用語を練習することが肝要であるから、特にこの一項を設けたのである。

(二)要項 文語動詞活用の種類は、活用表に依つて知らしめるが最も便宜であるから、原書「三一頁」に文語動詞活用表を舉げた。又略表にすれば左の通りである。



○練習 一 文中の「は」は動詞、附記はその活用の種類である。

- (一)賢者は治に居て亂を忘れず。 (わ行上二、ら行下二)
 - (二)熱心に研究すれば、學業日に進む。 (か行上二、さ行四)
 - (三)朝は五時に起き、夜は十時に臥す。 (ら行四、や行下二)
 - (四)川を渡り、山を越ゆれば、市街も見ゆ。 (ら行四、ま行四)
 - (五)皇國の興廢その一戦にあり。各員一層奮勵努力せよ。 (ら行四、ま行四)
- 二 文中の「は」は動詞、附記はその活用形の名である
- (一)來るものをば拒まず、去るものをば追はず。 (ら行四、ま行四)
 - (二)絶えず 流るゝ清水は、晝夜に止むことなし。 (ら行四、ま行四)
 - (三)事の成るは、よく難きに堪へ 忍ぶにあり。 (ら行四、ま行四)
 - (四)人は己を黷し、人を咎めず、わが説の足らざるを尋ねべし。 (ら行四、ま行四)

(五)大空にそびえて見ゆる高嶺にも、登れば登る道はありけり。(明治天皇)

三 文語動詞活用の誤は左の()内の通りに正すのである。

- (一) 疲る (疲るゝ、ら行下二段、連體形) 覺へ (覺え、や行下二段、未然形) 構え (構へ、は行下二段、連用形) 据へ (据ゑ、わ行下二段、連用形) 違ふ (違ふる、は行下二段、連體形) 失なふ (失ふ、は行四段、終止形) 問え (問へ、は行下二段、命令形) 問う (問ふ、は行四段、連體形) 恥する (恥づ、た行下二段、終止形) 言う (言ふ、は行四段、連體形) 用い (用ひ、は行上二段、未然形) 悔いる (悔ゆる、や行下二段、連體形)

第四節 口語動詞の活用形

口語動詞の活用は左の五種のみである。

一 口語四段活用 口語動詞の四段活用は、文語動詞の四段活用と大體類似してゐるが、唯文語動詞のなる行變格「死ぬ」の語が、この四段活用に轉じ、又ら行變格「居る」

の語が、この四段活用に轉じてゐることが差異點である。又一般に文語動詞の已然形に當る部分は、口語動詞では假定の條件を表す意味となるから、已然形と呼ばないで、之を假定形と呼ぶことも差異點である。

- 二 口語上一段活用、文語動詞の上一段活用、「着」「干」「見」「射」「居」は口語でも、同様に上一段活用である。又文語動詞の上二段活用、「起く」「落つ」「強ふ」「恨む」「報ゆ」「懲る」等は、口語では上一段活用に轉じてゐることが差異點である。
- 三 口語下一段活用 文語動詞の下一段活用、「蹴る」は口語でも、同様に下一段活用である。又文語動詞の下二段活用、「得」「受く」「寄す」「捨つ」「連ぬ」「教ふ」「始む」「覺ゆ」「嗜る」「植う」等は、口語では下一段活用に轉じてゐることが差異點である。
- 四 口語か行變格活用 文語の終止形「來は」、口語では「來る」となり、文語の命令形「來よ」は、口語では「來い」と轉じてゐることが差異點である。
- 五 口語さ行變格活用 文語の未然形は「筆記せず」の「筆記せぬ」の如く一種であるが、口語では「筆記せぬ」と「筆記しない」との語の如く、二種の活用形があり、又終止形は文語の「筆記す」が、口語では「筆記する」となり、又命令形は文語では「筆記せよ」の一種であるが、

口語では「筆記せよ」「筆記しろ」の如く、二種の用法のあることが差異点である。
○練習 一 左の語の文語と口語との活用形の差異は左の通りである。

- (一) 生く 文語(か行上二段) く(終止形) くる(連體形)
 - 口語(か行上一段) くれ(已然形) きる(連體形)
- (二) 生ゆ 文語(や行下二段) ゆ(終止形) ゆる(連體形)
 - 口語(や行下二段) えれ(已然形) える(連體形)
- (三) 生ず 文語(さ行變格) ず(終止形)
 - 口語(さ行變格) ずる(終止形)
- (四) 植う 文語(わ行下二段) う(終止形) うる(連體形)
 - 口語(わ行下一段) ゑれ(已然形) ゑる(連體形)
- (五) 生長す 文語(さ行變格) す(終止形)
 - 口語(さ行變格) する(終止形)

○備考 以上の文語と口語との活用形の差異は、本文中の活

用表及び卷末の附表に就いて、通覽せしめるが宜しいのである。
二 文中の口語動詞の活用名・活用形は左の通りである。

- (一) 棄てる(か行下二段、連體形) あれ(ら行變格、假定形) 助ける(か行下一段、連體形) ある(ら行變格、終止形)
 - (二) 嫌ふ(は行四段、連體形) 強ひる(は行上一段、終止形)
 - (三) 教へる(は行下一段、連體形) 來て(か行變格、連用形)
 - (四) 求め(ま行下一段、連用形) 逃げ(か行下一段、未然形) し(さ行變格、連用形)
 - (五) 起き(か行上一段、連用形) 見る(ま行上一段、終止形) 見(ま行上一段、連用形) 渡さ(さ行四段、未然形)
- 三 口語動詞活用の誤は左の()内の通りに正すのである。
- (一) 遣えれ(遣へれ、は行下一段、假定形) 失なう(失ふ、は行四段、終止形)
 - (二) 生くる(生きる、ら行上一段、連體形) 生かし(生し、さ行四段、連用形)
 - (三) 著こび(著び、は行四段、連用形) 誤まる(誤る、ら行四段、終止形)
 - (四) 盡くる(盡きる、か行上一段、連體形) 朽つる(朽

ちる、た行上一段、連體形)
(五) 攀じ(攀ち、た行上一段、連用形) 越へ(越え、や行下一段、連用形) 聳へ(聳え、や行下一段、連用形) 登る(登ら、ら行四段、終止形)

第五節 動詞の自他

(一) 目的 前章は動詞を外形上より區分したのであるが、又之を性質上より説くことも必要である。故にその性質上より動詞の自動詞と他動詞との意義及び用法を説くのである。
(二) 要項 「鳥鳴く」の「鳴く」、又「水流る」の「流る」の如きは自動詞であつて、その名稱は「自らだけに動作の止る動詞」といふ意味である。
又「鳥魚を食ふ」の「食ふ」、又「洪水家を流す」の「流す」の如きは他動詞であつて、その名稱は「他に動作が及んでゆく動詞」といふ意味である。
○注意 動詞には自動詞と他動詞との區別があるが、又自他何れにも用ひられるものもある。左の如し。

○自他兩用の動詞の例

- (一) 花開く 入戸を開く
- (二) 風吹く 彼は温き湯を吹く
- (三) 國旗門前に立つ 國旗を門前に立つ
- (四) 手網切る 馬は手網を切る
- (五) 敵軍押寄す 波は船を寄す

○注意 動詞には自動詞を他動詞に轉用してゐるものもあるが、それは他動詞と同意に解するのである。左の如し。

○自動詞轉用の例

- (一) 書を取り出でて讀む 「出でて」は「出して」よりの轉用語である。
- (二) 書を果して歸る 「果して」は「果して」よりの轉用語である。
- (三) 練習 一 左の語の()は自動詞、()は他動詞である。
(一) 白雲峰に懸りて、樹木を蔽()るを見たり。
(二) 人事を盡して天命を待たば、心に憂()ふるに足らず。
(三) 視れども見えず、聽けども聞えず、食へどもその味を知らず。
- (四) 祝祭日には必ず國旗が立つてゐる。
- (五) 文を作つて自ら心を慰める料とした。

二 文中の自他の誤は()内の通りに正すのである

- (一) 過ぎ(過し、さ行四段、他動詞) 悔ゆ(悔む、ま行四段、他動詞)
- (二) 見る(見ゆる、や行下二段、自動詞) 知れ(知り、ら行四段、他動詞)
- (三) 盡ひ(盡へ、は行下一段、他動詞) 終り(終へ、は行下一段、他動詞)
- (四) 終へ(終つ、ら行四段、音便、自動詞)

(五) 遠ひ(遠へ)、は行下二段、他動詞) 起き(起つ)、ら行四段、音便、自動詞)

第六節 動詞の音便

(一) 要項 動詞は發音の便宜上、文語でも口語でも、或音を他の音に變へて言ふことがある。之を音便といひ、音便の語は發音は勿論、その文字をも書き改めるのである。

一 動詞の音便

○種類 動詞の音便は左の四種類がある。

一 い音便 四段活用の語のまぎのいに轉するもの。

○類例 咬くきて 書かきて 磨こぎて 塞ふぎて

二 う音便 四段活用の語のひのうに轉するもの。

○類例 言いひて 従したがひて 養やしひて

三 撥音便 四段活用・な行變格活用の語のびみにの撥音んに轉するもの。

○類例 學まびで 讀よみで 死しんで

○注意 「ん」を「む」と誤つてならぬ。

四 促音便 四段活用の語のまぢひりの促音つに轉するもの。

○類例 行いきて 持もちて 買かひて 送おくりて

○注意 「つ」を省略してならぬ。

○練習 文中の―は音便語、附記は原音語である。

(一) 兄は彼の處に往つて留り、弟は彼の處を去つて還る。

(二) 藝者に勝つて後に、その経過を言つて笑つたり。

(三) 太郎は舟を漕いだり、水に泳いだりしてゐた。

(四) この仕事が進んでからは、次の事に取掛つてもよい。

(五) あの木の枝に止つて居た鳥が、いつの間にか飛んで行つた。

二 文中の音便の誤は()内の通りに正すのである
(一) 讀よんで (讀よみて)の音便) 誓ちかふ (誓ちかう、誓ちかひの音便)

(二) 臨まんで (臨まんで)の音便) 退ひいて (退ひいて、退きての音便)

(三) 合あひた (合あひた 合あひたるの音便、略音) 行いこう (行いかう、行いかむの音便) じや (ぢや、ではの通音)

(四) 苦くしい (苦くしい、形容詞、苦くしきの音便)

(五) 忍しのむで (忍しのんで、忍しのびての音便) 當あらう (當あらう、當あらむの音便)

(六) 抱かきて (抱かいて、抱かきての音便) 請こらうて (請こらうて、請こらうての音便)

第七節 動詞語尾の假名遣

○要項 「習ひ」、「報ひ」、「率ひ」、「強ふ」、「植う」と、「整へ」、「消え」、「飢ゑ」との如きは、動詞語尾の發音は同じでも、活用が違ふから、各假名遣に差別がある。此等を正しく書き表す方法を動詞語尾の假名遣法といふ。その用法を知る三種の方法及び假名遣の誤り易いもの重なる用例を、原書「四三頁、四四頁」に委しく挙げてある。

第八節 動詞の總括

○練習 一 文中の動詞は左の通りで、活用法は活用表記入の通りに答へさせるのである。

(一) 交る へ行四段、連體形。より へ行四段、連用形。移る へ行四段、終止形。

(二) 思ひ へ行四段、連用形。しのぶ へ行四段、連體形。あら へ行變格、未然形。

(三) あり へ行變格、連用形。多から へ行變格、未然形。(形容動詞) あか へ行四段、未然形。向は へ行四段、未然形。

(四) 過ぎ へ行上二段、連用形。來し へ行變格、連體形。顧みれ へ行上一段、已然形。心地せ、へ行變格、未然形。

(五) 嚙ん 嚙みの音便、へ行四段、連用形。吐き へ行四段、連用形。出す へ行四段、連體形。語つ 語りの音便、へ行四段の連用形。

(六) なつ なるの音便、へ行四段の連用形。悔い へ行上一段、未然形。堪へ へ行下一段、連用形。勉勵せ へ行變格、命令形。

(七) 落ち へ行上二段、連用形。下る へ行四段、連體形。なし へ行四段、連用形。ゐ へ行上一段、終止形。

二 文中の動詞の誤は()内の通りに正すのである
(一) 澄あんで (澄あんで)の音便、へ行四段の連用形) さへ (さえ、や行下二段、連用形) 聞へ (聞え、や行下二段、連用形)

(二) 癒へ (癒え、や行下二段、連用形) 消ゑ (消え、や行下二段、連用形) 失し (失せ、さ行下二段、連用形)

(三) 誓ふて (誓うて、誓ひての音便、へ行四段、連用形) 報ふ (報ゆ、や行下二段、終止形)

(四) 恥じ (恥ち、へ行上二段、連用形) 改ため (改め、ま行下二段、連用形) 覺ゑ (覺え、や行下二段、連用形)

(五) 負ふ (負う、負ひの音便、へ行四段、連用形) 教え (教へ、へ行上一段、未然形)

(六) 攀じ (攀ち、へ行上二段、連用形) 越へ (越え、や行下二段、連用形)

(七) 浮むで (浮んで、浮びての音便、へ行四段、連用形) 蔽ふて (蔽うて、蔽ひての音便、へ行四段、連用形)

見へ (見え、や行下一段、未然形)

第五章 形容詞

○目的 形容詞の活用する種類及び用法等を説く。

第一節 總説

○要項 形容詞の用例を擧げて、その定義を説く。

第二節 文語形容詞の活用

○要項 形容詞も動詞の如く活用する。随つて「語根」「語尾」及び「活用」即ち「はたらき」も動詞の部より類推せしめて、説明することが出来る。

第三節 文語形容詞の活用形

○活用形 形容詞の活用形の名稱も動詞の如くであるが、唯命令形がない。又連用形は「山高く聳ゆ」の「高く」の如く、副詞に轉ずる語形であるから、副詞形ともいつてゐる。文語形容詞活用の種類は「く活用」と「しく活用」との二種あるのみである。

一 く活用の語 赤し 堅し 寒し 淺し 薄し 狭し

辛し 白し 高し 早し 遅し 長し

二 しく活用の語 新し 美し 樂し 悲し 久し 煩し

怪し 貧し 苦し 正し 睦し 嬉し

第四節 口語形容詞の活用形

○要項 口語形容詞の種類も、文語形容詞の如く、「く活用」と「しく活用」との二種あるのみである。

(二)注意 文語の未然形「高くば」は、口語では用ひないで、已然形に當る部分の「高ければ」を用ひて、假定の意味を表し、假定形といつてゐることは、文語形容詞との差異點である。又文語形容詞のやうな命令形はない。

第五節 形容詞の音便

(一)種類 形容詞の音便は左の二種類ある。

一 い音便 きのいに轉ずるもの。

○類例 善きかな 早きかな 悲しきかな

○注意 「す」を「む」と誤つてならぬ。

二 う音便 くのうに轉ずるもの。

○類例 暖くなる 文善くなる 深くして 樂しくして

○注意 「う」を「ふ」と誤つてならぬ。

(二)備考 「使命を全くす」の「使命を全うす」と、「君命を辱くす」の「君命を辱うす」となる、「全くす」「辱くす」は形容詞であるが、その音便となる方法は、このう音便に類似してゐる。

○練習 一 左の文の「」を引いてあるものは音便語である。

(一)山高うして、清い水もその麓に流る。

(二)白い花、赤い花、いづれも美しく見えたり。

(三)善いかな、かの人の任務を重んずることや。

(四)辛うじて問題を解き得たが、面白う感じた。
(五)ひもじい時には、まづいものがない。
二 文中の音便語の誤は左の()内の通りに正すのである。

(一)樂しひ (樂しき) 樂しきの音便 悲しひ (悲しき) 悲しきの音便

(二)辱ふ (辱う、辱くの音便) 全ふ (全う、全くの音便)

(三)早ふ (早う、早くの音便) 逢ふ (逢う、逢ひの音便)

嬉しひ (嬉しむ、嬉しむきの音便)

(四)わるひ (わるい、わるきの音便) よろしふ (よろしう、よろしの音便)

(五)よお (よう、よくの音便) 下さひ (下さい、下されの音便)

ありがとふ (ありがたう、ありがたくの音便)

第六節 形容動詞

○要項 形容動詞は形容詞が動詞に結合して、一種の動詞となつたものであるが、形容詞を説明して後に説明するが便宜であるから、この場合に説明するのである。

○形容動詞 形容詞の連用形「高く」「美しく」が、ら行變格活用「あり」に續き、約められて「高くあり」「美しくあり」となつた類は、ら行變格活用となり、形容詞「高く」「正しく」が、さ行變格活用に續いて、「高くす」「正しくす」となつた

類は、さ行變格活用になつたもので、此等を含せて、形容動詞と呼ばれてゐる。左の語などが、その類例である。

遠かり 早かり 遅かり 面白かり 寂しかり 白くす 黒くす 善くす 悪くす

第七節 形容詞の總括

○練習 一 文中の「」は形容詞、附記は活用形の名である。

(一)この物は古くして、美しくはなけれども、品質は宜しく、速く、運送し、速く。

(二)心正しく才賢き人を親しき友とせよ。

(三)今は寒からず暑からず、最も好き季節なり。

(四)こゝは山には遠いが、海には近く、新しい魚が多い。

(五)あの人は家貧しいけれども、奉公の念の篤い人である。

二 文中の用語の誤は()内の通りに正すのである
(一)嘲けり (嘲り、ら行四段、連用形) 笑ふて (笑うて、笑ひての音便、は行四段、連用形) 悪しし (悪し、しく活用、終止形)

(二)白ふ (白う、白くの音便、く活用、連用形) 見へ (見え、や行下二段、連用形) 珍しし (珍し、しく活用、終止形)

(三)辱ふ (辱う、辱くの音便、く活用、連用形) 堪え (堪

- へ、は行下二段、未然形)
- (四)よふ (よう、よくの音便、く活用、連用形) 嬉しむ (嬉しい、しく活用、連體形)
- (五)久しふ (久しう、久しくの音便、しく活用、連用形) 歩む (歩い、歩きの音便、連用形) 苦しふ (苦しう、苦しくの音便、連用形) 思わ (思は、は行四段、未然形)

第六章 助動詞

第一節 總説

○目的 助動詞の用例を挙げて、その定義を説く。

第二節 助動詞の種類

- (一)目的 文語助動詞の種類・活用及び接続を説くのである。
- (二)方法 助動詞はすべて意味上より分類して説くのである。又助動詞及び助詞は複雑であるから、之を精密に生徒に會得させることは甚だ困難である。故に明瞭に説く工夫が肝要である。
- (三)要項 助動詞も動詞の如く活用し、文語助動詞には左記の如く十二種類がある。
- (四)接続 主として動詞に続くから、代表的に助動詞と呼んでゐるが、又左の例の如く、名詞・代名詞・形容詞又他の助動詞にも続くものもある。

- 一 運動會に行きぬ 知行四段活用の「行き」に續いた 楠木正成は忠臣なり 名詞の「忠臣」に續いた
- 二 彼は彼たり我は我たり 代名詞の「彼又「我」に續いた
- 三 心の樂しきなり 形容詞しく活用の「樂しき」に續いた
- 四 彼は忠臣たるべし 助動詞の「たる」に續いた。
- 五 一 受身の助動詞

(一)要項 受身の助動詞は「る」「らる」「る」の二種である。

(二)接続 受身の助動詞は左の如く動詞の未然形に続く。

- 一 彼は友に恵まる 四段活用の未然形に続く例
- 二 彼はその子に往なる 変活用の未然形に続く例
- 三 彼は長く友に居らる 変活用の未然形に続く例
- 四 我は友より入會を強ひらる 上二段活用の未然形に続く例
- 五 少年長者より教へらる 下二段活用の未然形に続く例

以下類推せよ。

(一)要項 可能の助動詞

(一)要項 可能の助動詞は「る」「らる」「べし」「べから」の四種である。

(二)注意 「べから」は終止形以下の「べかり」「べかる」「べかれ」は現代文では殆ど用ひられない。

(三)接続 ららるの接続は左の如く受身の助動詞に同じである。又べしべかりの接続は左の如く動詞の終止形に続く。但

しら變活用よりのみは連體形に続く。

- 一 一日に二冊の書を読まる 四段活用の未然形に続く例
- 二 何人にも答へらる 下二段活用の未然形に続く例
- 三 千引の岩をも砕くべし 四段活用の終止形に続く例
- 四 日本軍の勢當るべからず 四段活用の終止形に続く例
- 五 日本軍の勝利あるべきは疑なし 変活用の連體形に続く例

三 自發の助動詞

(一)要項 自發の助動詞は「る」「らる」「る」の二種ある。その活用及び接続は可能の助動詞の「る」「らる」に同じである。

(二)注意 自發の助動詞を可能の助動詞の部類に入れて説いてある書も多くあるが、一箇獨立して説く方が便宜である。

四 使役の助動詞

(一)要項 使役の助動詞は「す」「さす」「しむ」の三種ある。

(二)接続 使役の助動詞は左の如く動詞の未然形に続く。

- 一 父は子に字を習はす 四段活用の未然形に続く例
- 二 父は子に往なす 変活用の未然形に続く例
- 三 父は子に長く居らす 変活用の未然形に続く例
- 四 母は子に早く起きさす 知行上二段活用の未然形に続く例
- 五 師は生徒に授業を受けさす 知行下二段活用の未然形に続く例

六 父は子に書を読ましむ 四段活用の未然形に続く例 他は類推せよ。

五 尊敬の助動詞

(一)要項 尊敬の助動詞は「る」「らる」「す」「さす」「しむ」の五種ある。前の受身・使役の助動詞のそれ々と略同語形で、接続法もそれと同様である。又動詞の轉來語もある。

六 時の助動詞

(一)要項 時の助動詞は「完了」「過去」「未來」の三種ある。

(一)完了の助動詞

(一)要項 完了の助動詞には「つ」「ぬ」「たり」「り」の四種ある。

(二)接続 「つ」「ぬ」「たり」は左の如く何れも動詞の連用形に続き、「り」のみは四段活用の已然形と、さ變活用の未然形に続くものである。但し「ぬ」は左變活用に於ては續かない。

一 文を作りつ 四段活用の連用形に続く例

二 文を作りぬ 四段活用の連用形に続く例

三 文を作りたり 四段活用の已然形に続く例

四 文を作れり 四段活用の已然形に続く例

五 文を作ることせり 変活用の未然形に続く例

(二)過去の助動詞

(一)要項 過去の助動詞は「き」「けり」の二種ある。

(二)接続 過去の助動詞は左の如く動詞の連用形に続く。

一 昨日は雨降りき
 二 昨日は雨降りけり
 又きししかば變活用・さ變活用に續くには、左の特別の接續法がある。

(動詞) (助動詞) (實例)

(一) 變活用
 未然形：來(こ)し
 連用形：來(き)しか
 未然形：爲(せ)し
 連用形：爲(し)しか
 (三) 未來の助動詞
 未然形：爲(せ)し
 連用形：爲(し)しか
 我訪問せし事あり
 しか：我訪問せしかば喜ばれたり
 我訪問しき

○要項 未來の助動詞は「む」の一種である。
 ○接續 未來の助動詞は左の如く動詞の未然形に續く。
 一 明日は雨降りむ 四段活用の未然形に續く例
 二 彼は賞與を受けむ 下二段活用の未然形に續く例
 ○練習 文中の「は」は時の助動詞、附記はその種類である。
 (一) 散りたる花は、雪の如く積りぬ。
 (二) 民當み國榮えしかば、天下平らかに治りき。

(三) 實朝も失せてければ、政權は北條氏に移りたりき。
 (四) 研究の志ありたれど、水泡に歸せりと歎かれたり。
 (五) 潮みちぬ。追風も吹きぬべしといへば、舟に乗りぬ。
 七 推量の助動詞

七 推量の助動詞

(一) 要項 推量の助動詞は「む」「らむ」「なむ」「けむ」「べし」「まし」「らし」「めり」の八種ある。
 (二) 接續 推量の助動詞は左の如く續く。
 一 近日菊の花開かむ。動詞・助動詞の未然形に續く例
 二 人皆嬉しと觀らむ。動詞・助動詞の終止形に續く例
 三 種々の花も咲きなむ。動詞・助動詞の連用形に續く例
 四 白菊の花も咲きけむ。右に同じ
 五 近日菊の花咲くべし。動詞・助動詞の終止形に續く例
 六 山には時雨降らまし。動詞・助動詞の未然形に續く例
 七 人皆樂しと言ふらし。動詞・助動詞の終止形に續く例
 八 紅葉亂れて流るめり。右に同じ
 ○但しらむべしらしめりはら變活用よりは連體形に續く。
 ○べしの解説
 「べし」は國文中に多く用ひられ、本來は推量の意であるが、種々の轉義の場合もあつて、左記の如くに解く。
 (一) 風起らば後には雨止むべし。(推量)「あらう」と解く。

(二) 三尺の秋水鐵をも斷つべし。(可能)「出来る」と解く。
 (三) 油盡くれば燈火は消ゆべし。(當然)「當である」と解く。
 「ねばならない」と解く。
 (四) 我も朝は必ず早く起くべし。(決意)「ことにする」と解く。
 (五) 時刻より講堂に參集すべし。(命令)「よ」と解く。

八 指定の助動詞

(一) 要項 指定の助動詞は「なり」「たり」の二種ある。
 (二) 接續 指定の助動詞は左の如く續く。
 一 かなたに見ゆるは梅の花なり 體言の名詞に續く例
 二 鶯春を告ぐるなり 下行下二段活用の連體形に續く例
 三 彼の書は進だ宜しきなり 形容詞の連體形に續く例
 四 君君たり臣臣たり 體言の名詞に續く例
 九 詠歌の助動詞
 (一) 要項 詠歌の助動詞は「なり」「けり」の二種ある。
 (二) 接續 指定の助動詞の「なり」は動詞の連體形に續くが、この場合の「なり」は動詞の終止形に續くことが特異點である。
 (三) 注意 「けり」は過去の助動詞の「けり」と同語形であるが、その意味の違ふことが差異點である。
 一 谷の鶯春を告ぐなり 下行下二段活用の終止形に續く例

二 流れて早き月なりけり 變活用の連用形に續く例
 一〇 打消の助動詞
 (一) 要項 打消の助動詞は「ず」「ざり」「じ」「まし」の四種ある。
 (二) 接續 打消の助動詞は左の如く續く。
 一 鶯未だ鳴かず 下行四段活用の未然形に續く例
 二 余は出席せざりき 變活用の未然形に續く例
 三 彼はまだ遠く行かじ 四段活用の未然形に續く例
 四 人は未だ知るまじ 四段活用の終止形に續く例
 五 彼は最早心配あるまじ 變活用の連體形に續く例
 一一 希望の助動詞
 (一) 要項 希望の助動詞は、「たし」「まほし」「なむ」の三種ある
 (二) 接續 希望の助動詞は左の如く續く。
 一 良友に交りたし 四段活用の連用形に續く例
 二 早く行かまほし 四段活用の未然形に續く例
 三 この書を読まなむ 右に同じ
 一二 比喩の助動詞
 (一) 要項 比喩の助動詞は「如し」の一種である。
 (二) 接續 比喩の助動詞は左の如く續く。
 一 歳月は流るゝ如し 下行下二段活用の連體形に續く例
 二 歳月は水の流るゝが如し 下行下二段活用の連體形の下に「が」を挟む例

三 光陰は矢の如し 名詞の下に「の」を挟む例
○練習 左の文中の「は」は助動詞、附記はその種類である。

(一) 助けらるゝものならば助けたきものなり。
可能 當然 指定

(二) おのが成すべき務は決して怠るべからず。
當然 指定 打消

(三) 彼が口惜しく思ひぬるもことわりならずや。
完了 指定 打消

(四) 明日は晴れなむとぞいふなる。さもあらなむと念じをりぬ。
完了 推量 指定

(五) 歩まは歩まれしを、人に勧められて、已むを得ず車に乗れり。
可能過去 受身 打消

第三節 口語助動詞の種類

○要項 口語の助動詞は、すべて文語の助動詞より類推して説くが便宜である。之を文語の如く、意味上より左の十一種に分けて説く。又文語の詠歎の助動詞に當るものが、口語ではないことが差異點である。

一 口語受身の助動詞

(一)要項 「れる」は文語の「る」より、「られる」は文語の「らる」よりの轉成語である。

(二)注意 命令形に「れよ」の外に「れる」、「られよ」の外に「られる」のあることが差異點である。

二 口語可能の助動詞

○要項 可能の助動詞は、活用形が受身の助動詞に同じであるが、命令形のないことが差異點である。

三 口語自發の助動詞

○要項 自發の助動詞も、活用形が受身の助動詞に同じであるが、命令形のないことが差異點である。

四 口語使役の助動詞

(一)要項 「せる」は文語の「する」より、「させる」は文語の「さす」よりの轉成語である。

(二)注意 命令形に「せよ」の外に「せろ」、「させよ」の外に「させろ」のあることが差異點である。他に「ます」もある。

五 尊敬の助動詞

(一)要項 尊敬の助動詞は、活用が受身の助動詞に同じであるが、命令形のないことが差異點である。

六 口語時の助動詞

(一)完了の助動詞

○要項 「たい」は文語「たし」よりの轉成語である。

一一 口語比喩の助動詞

○要項 「やうだ」は「様子である」の略語の「やうである」の約語である。

○練習 左の「は」は口語助動詞、附記はその種類である。

(一) 山の上からは市街がよく見られよう。
可能 推量

(二) 花を咲かせるも雨で、散らすも亦雨ではないか。
使役

(三) 今日白い花が咲いたが、明日は赤いのが聞かう。
推量

(四) 雨が止んだら散歩に出掛けようと思つてゐる所だ。
指定 推量

(五) 朝の一番列車で立ちたいから、早く起きなければならぬ。
打消

第四節 助動詞相互の接続

(一)要項 以上の助動詞の接続は、主として動詞・名詞・代名詞・形容詞よりの接続法を説いたが、尙助動詞相互の接続もすべて動詞に接続する方法に倣つて、類推することが出来る。

(二)注意 助動詞の接続は前記のやうに複雑であるが、大體簡明に説くことが肝要である。複雑に説いては、生徒に判明し難い場合も生じないとも限らぬ。

(一)要項 「た」は文語助動詞「たり」の略語である。

(二)注意 「た」の活用は假定形・命令形に活用しない。

一 うまく成功したらうか たらは未然形

二 私が成功したら君を助けよう たらは未然形

(三) 過去の助動詞

○要項 「た」は文語の助動詞「たり」の轉成語である。

(三) 未来の助動詞

○要項 「う」は「む」より、「しよう」の「よう」は「せむ」の「む」よりの轉成語。各終止形・連體形のみを活用する。

七 口語推量の助動詞

○要項 「う」は文語の助動詞「む」より、「よう」は「む」より、「らし」は「らしき」よりの轉成語である。

八 口語指定の助動詞

○要項 「だ」は「である」の約語。「です」は「であります」の約語である。故に「です」は「だ」よりも相手に對して、丁寧の意を表す語である。

九 口語打消の助動詞

(一)要項 「ぬ」は文語の打消の「ぬ」より、「ない」は形容詞の「なし」より、「まし」は文語の「まし」よりの轉成語である。

(二)注意 「ぬ」は「ん」と發音し、又書くこともある。

一〇 口語希望の助動詞

第五節 助動詞の總括

○練習 一 左の文中の―は助動詞、附記はその種類である。

(一)吾人は義勇公に奉せざるべからず。
打消 當然 打消

(二)辭らずして學を勉めば、いかでか古人に及ばざるべき。
打消 當然 打消

(三)我も行かなむ。今日行かずば行かる、日もあらざるべし。
希望 打消 推量

(四)極めて自由な氣分に充ちた世界のやうに思はれた。
完了 自發 推定

(五)雨が止んだから、散歩に出掛けようと思つてゐる所である。
推定 推量

二 文中の用語の誤は()内の通りに正すのである

(一)觸る、(觸る、ら行下二段、終止形)

(二)考ふ(考ふる、は行下二段、連體形) られ(らる、可能の助動詞、終止形)

(三)任し(任せ、さ行下二段、連用形) 解決され(解決せられ、さ行變格、未然形)

(四)よう(やう、様の意の名詞) ささう(させよう、使役の助動詞と推量の助動詞との接続) でしょう(でせう、指定の助動詞と推量の助動詞との接続)

(五)やう(よう、推量の助動詞) なからう(なからう、ら行變格の形容動詞より、推量の助動詞うに接続した。

第七章 助詞

第一節 總説

○目的 助詞の用例を擧げて、その定義を説く。

第二節 助詞の種類

(一)要項 助詞はその續く品詞を基本として、左の三類に區別し、簡明にその用法を説くが肝要である。

(二)方法 助詞の文法的説明は微細な事項であるが、學問的にも實用的にも必要な場合が多い。

第一類 名詞・數詞・代名詞に添ふ助詞

○要項 名詞・數詞・代名詞に添ふ助詞は、大要左の十三種である。

- (一)が 君が代。 梅が枝。 所有の意を表した。
- 天が下。 佐渡が島。 接続の意を表した。
- (二)が(口語) 鶯が鳴く。 旭が照る。 主體を表した。
- (三)の 父の書。 友人の家。 所有の意を表した。
- 世の中。 富士の山。 接続の意を表した。
- 花の咲く園。 秋風の吹く頃。 主體を表した。

(四)つ

(五)を

(六)に

(七)へ

(八)と

花の都。 夢の世。 比喩を表した。

天つ神。 沖つ白波。 接続の意を表した。

山を望む。 花を惜む。 動作の目的物を表した。

山を越ゆ。 鳥空を飛ぶ。 動作の場所を表した。

故園を去る。 鼠穴を出づ。 動作の起點を表した。

山に登る。 書を机に載す。 場所を表した。

教に従ふ。 この一戦にあり。 標準を表した。

月に叢雲。 花に風。 添加の意を表した。

兄に劣らず。 金は銀に優る。 比較の意を表した。

前へ進め。 都へ上る。 方向を表した。

花と月と雪とを眺むるに宜し。 並列を表した。

雪と散る。 雨と飛ぶ。 比喩の意を表した。

幼名を牛若丸といへり。 指定の意を表した。

友人と月を見る。 父と行く。 共同の意を表した。

終日雨降りと降る。

甲と乙とは相等し。

繼續の意を表した。 比較の意を表した。

○備考 以下(九)より(三)まで茲に省略す。

○練習 左の文中の―を引いてあるものは助詞である。

(一)父母の恩は山より高く海より深し。

(二)左へ折れ右に曲り、社の前まで行け。

(三)幾とせこゝに鍛へたる、鍛より堅き腕あり。

(四)何時の間にか、柿の實が木から落ちた。

(五)昨日の温度は三十度まで上つてあつた。

第二類 動詞・形容詞・助動詞に添ふ助詞

○要項 動詞・形容詞・助動詞に添ふ助詞は、大要左の二十五種である。

- (一)は 風吹かば波立たむ。 假定の原因の意を表した。
- (二)は(口語) 風吹けば波が立たう。 右に同じ。
- (三)たら(口語) 雨が降つたら行くまい。 右に同じ。
- (四)ば 風吹けば波立つ。 確定の原因の意を表した。
- (五)から(口語) 風吹くから波が立つ。 右に同じ。
- (六)ので(口語) 天氣が好いので出掛けた。 右に同じ。

<p>(七) 繪に書く^レ筆も及ばじ。 假定の反対の意を表した。</p>	<p>○備考 以下(六)より(三)まで茲に省略す。 ○練習 左の文中の「」を引いてあるものは助詞である。</p>
<p>(八)とも 年老いて悔ゆとも及ばじ。 右に同じ。</p>	<p>(一)明日天氣よく候遠足せむ。</p>
<p>(九)ても(口語) 今から行つても間に合ふまい。 右に同じ。</p>	<p>(二)天氣晴則なれども、波立つこと高し。</p>
<p>(一〇)ど 聲聞ゆれど委は見えず。 確定の反対の意を表した。</p>	<p>(三)日は暮れかゝるに、宿るべき所は未だ遠し。</p>
<p>(一一)ども 天氣晴則なれども波高し。 右に同じ。</p>	<p>(四)それを知りながら、改めないことはよくない。</p>
<p>(一二)けれども(口語) 見たけれども見えなかつた。 右に同じ。</p>	<p>(五)私より手紙を送つたが、まだその返事は来ない。</p>
<p>(一三)けれど(口語) 呼んだけれど聞えなかつた。 右に同じ。</p>	<p>○要項 種々の品詞に添ふ助詞は、大要左の二十九種である。</p>
<p>(一四)に 花あらむと思ふに^レ入りて見る。 原因の意を表した。</p>	<p>(一)は 柳は緑に、花は紅なり。 差別の意を表した。</p>
<p>(一五)を 梅の花咲けるに^レ鶯来て啼かず。 反対の意を表した。</p>	<p>(二)は 昨日風荒々しく吹きたるは。 感歎の意を表した。</p>
<p>(一六)を 花おもしろきに^レ霞もかゝれり。 添加の意を表した。</p>	<p>(三)も 湯をば飲めども、水をば飲まず。 差別の意を表した。</p>
<p>(一七)を 女より語るを^レ我も語りぬ。 接続を表した。</p>	<p>(三)も 白金も黄金も玉も何かせむ。 並列の意を表した。</p>
<p>(一八)を 今日寒きを^レ埋火かきおこす。 原因の意を表した。</p>	<p>(四)ぞ 思ひもよらず。聞らずも友に逢ふ。 強意を表した。</p>
<p>(一九)を 堪へがたきを^レ遂に成したり。 反対の意を表した。</p>	<p>(四)ぞ 今日花をぞ眺むる。 強い指示の意を表した。</p>
<p>(二〇)を かくならむとは思はざりしを^レ。 感歎の意を表した。</p>	

<p>(五)なむ 幼くとも武士の子なるぞ。 感歎の意を表した。</p>	<p>(三)だに その一つだに^レ覚えず。 類推させる意を表した。</p>
<p>(六)や これなむ都鳥といふ。 指示の意を表した。</p>	<p>(三)でも(口語) その一つでも知らない。 右に同じ。</p>
<p>(七)や ありやなしや。 疑問の意を表した。</p>	<p>(四)すら 禽獸すら^レ禮を知る。 右に同じ。</p>
<p>(八)か 見よや聞けやといへり。 感歎の意を表した。</p>	<p>(五)さへ 今日晴れて日さへ^レ輝く。 添加の意を表した。</p>
<p>(九)か 空しく月日をや^レ過すべき。 反対の意を表した。</p>	<p>(六)さへ(口語) 今日は快い風さへ^レ吹く。 右に同じ。</p>
<p>(一〇)か 底ひなき淵やは^レさわぐ。 疑問の意を表した。</p>	<p>(七)まで(口語) 今夜は月まで^レ輝いてゐる。 右に同じ。</p>
<p>(一一)か 霞か雲かはた雪か。 疑問の意を表した。</p>	<p>(八)まで(口語) 以下(六)より(三)まで茲に省略す。</p>
<p>(一二)か 世の中は何が常なる。 反対の意を表した。</p>	<p>○練習 文中の「」を引いてあるものは助詞である。</p>
<p>(一三)か 世のさまにも似たるか。 反対の意を表した。</p>	<p>(一)思ひきやけふ君に^レ別れむとは。 常に良からぬ書を^レ讀み給ひそ。</p>
<p>(一四)か 一年に二度とだに^レ來べき春かは。 反対の意を表した。</p>	<p>(二)たとひ人には^レ知られずともおの^レが心に^レ恥ぢざるべき。</p>
<p>(一五)か 今日花をこそ^レ眺むれ。 強い指示の意を表した。</p>	<p>(三)たとひ人には^レ知られずともおの^レが心に^レ恥ぢざるべき。</p>
<p>(一六)し 書を^レ讀めり。必ずしも^レ然らず。 強意を表した。</p>	<p>(四)よく勉強さへ^レすればどんな事でも^レ出來よう。</p>

- (四) 父も母も昨日家に歸られた。
場所 並列 差別 疑問
 - (五) 私は明日行くか行かぬか判らない。
疑問
- 二 文中の誤は()内の通りに正すのである。
- (一) 雪だに (雪さへ、添加の意)
 - (二) 高山君 (高山君と、並列の意。又は父と)
 - (三) 乙丙 (乙丙と、並列の意。又は乙丙の差と)
 - (四) 欲すれば (欲せば、假定の意)
 - (五) 中へ (中に、場所の意) 方へ (方へ、方向の意)

第八章 副詞

第一節 總説

○目的 副詞の用例を挙げて、その定義を説く。

第二節 副詞の種類

(一) 要項 副詞は直に限定する語の上にあるものが通例であるけれども、又他の語句を隔てて、動詞や形容詞等の意味を限定するものもある。故に茲には、その語句を隔てた副詞と、又本来副詞と轉來副詞とを説く。

- (二) 練習 文中の「」は副詞、「」は限定してある語である。
- (一) 早く^{副詞}妄りに此の處に出入するを禁ず。
 - (二) 聊か感ずる所ありて、専ら實業に従事す。

- (三) 一度決心したる事は必ず成し遂ぐべし。
- (四) 昨日の競走に、彼は最も早く決勝點に入った。
- (五) 私は度々この文を読んだが、まだ諳誦することが出来ぬ。

第九章 接續詞

第一節 總説

○目的 接續詞の用例を挙げて、その定義を説く。

第二節 接續詞の種類

(一) 要項 接續詞の順接・逆接及び轉來の事項を説く。

- (二) 練習 文中の「」は接續詞、附記はその種類である。
- (一) 今日^{順接}は文法書を読み、次いで^{順接}國語もしくは英語を學ばむ。
 - (二) 彼の山は月又雲を觀るに宜し。されど^{逆接}樹木なきを憾む。
 - (三) 明日^{順接}參上仕るべく候間、御在宅下されたく候。
 - (四) 空は快く晴れ、それに^{順接}波さへ程かであつた。
 - (五) 今日^{順接}も亦彼を訪ねて見た。けれども^{逆接}また歸つて居らない。

第十章 感動詞

○目的 感動詞の用例を挙げて、その定義を説く。

- 練習 文中の「」を引いてあるものは感動詞である。
- (一) あな^{感動詞}あはれ尊き神の宮居かな。
 - (二) あつばれ^{感動詞}日本一の剛の者なるよ。
 - (三) いざ^{感動詞}共にかしこに行かまほし。
 - (四) おや^{感動詞}お珍しい。よくいらつしやいましたね。
 - (五) もし^{感動詞}これはあなたの物ではございませんか。

第十一章 品詞の轉成

○目的 左の品詞の轉成したものを説く。

- 第一類 轉成の名詞
 - 第二類 轉成の代名詞
 - 第三類 轉成の副詞
 - 第四類 轉成の接續詞
 - 第五類 轉成の感動詞
- 例は茲に略す。

○練習 文中の「」は轉成の品詞、附記はその品詞名である。

- (一) 絶えず^{副詞}勉學を怠らず、常に父の教に従ふ。
名詞
- (二) 始^{名詞}あらざることなく、よく^{副詞}終あること鮮し。
名詞
- (三) 祖先の祭を^{名詞}慎み、朝夕父母の戒を守る。
副詞
- (四) 足下の事業は^{名詞}つまり成功^{副詞}させよう。
代名詞

- (五) まあ^{感動詞}これは困難である。それでも^{感動詞}勉強すれば出来ませう。

第十二章 頭尾語

○目的 文中に用ひる接頭語及び接尾語の用法を説く。

(一) 要項 以上説明した諸種の語は、それ／＼品詞中に分類されるものであるが、その品詞中に入らないものに、接頭語及び接尾語があつて、之を説くことは、實用上にも必要であるから、茲に説くのである。

第一類 接頭語

- (一) 要項 接頭語は或語の頭に接續する語の意義の名稱で、獨立しては意味をなさないものであるが、他の語に附いて、或語の意味を鄭重にしたり、強味を添へたり、平穩にしたり、語調を整へたりなど、幾らかの作用を與へるものもあり、又は特別の意味を添へるものもあるが、或は特別の意味を與へないものもある。左の例を見よ。
- 一 幸運日に日にいや増す 添加の意を添へた。
 - 二 今日書を見てた易く知りたり 意味を添へない。
 - 三 將來の方針をうち合す 強味を添へた。
 - 四 山上の月はまん圓い 強味を添へた。
 - 五 あの人^{感動詞}は體がが弱い (口語) 別に意味を添へない。
- 左の例の語は意味を添へないものである。

- 一 彼の人は急にたどる。「た」は「手」の通背語。
- 二 小(を)山田に稻刈る人あり。「を」は小さい意でない。
- 三 彼の人は橋を渡る。「い」は「氣」の意から出た語。
- (二)注意 接頭語が附いて出来た語をば一語とし、品詞としては、附かない以前の元來の語と同品詞に扱ふのである。

第二類 接尾語

- (一)要項 接尾語は或語の尾位に接續する語の意義の名稱で、獨立しては用ひられないものであるが、他の語の尾位に附いて、何れも或意味を添へるものである。
- 接尾語は左の例の如くに、或意味を添へるものである。
- 一 今來られたるは山本君なり。「君」は敬稱語。
- 二 我等の友も今や時めく。「等」は複數、「めく」は榮える意。
- 三 いかにも心ありげに見ゆ。「げ」は「氣」即ち状態の意。
- 四 皆さん男らしい人となりなさい(口語)。「さん」は口語の敬稱語。「らしい」は状態の意。
- 五 花見がてら公園に行つた。「がてら」は兼行ふ意。
- (二)注意 接尾語が附いて出来た語をば一語として、その性質によつて、種々の品詞となること左の通りである。
- 一 今來られたるは山本君なり。「山本君」は固有名詞。
- 二 我等の友も今や時めく。「時めく」は動詞、か行四段活用。

- 三 いかにも心ありげに見ゆ。「心ありげ」は副詞。
- 四 皆さん男らしい人となりなさい。「皆さん」は代名詞。「男らしい」は形容詞、しく活用。
- 五 花見がてら公園に行つた。「花見がてら」は副詞。
- 練習 文中の―は接頭語接尾語、附記はその種類である。
- (一)雪の重みに壓されて、を笹は折れむばかりなり。^尾
- (二)吹き來る風も春めきて、野端の梅はやう／＼咲きそめた^尾り。
- (三)み山の奥の笹も暗き森の中を疲れむばかりさまよひけ^尾り。
- (四)散歩がてらちと私の宅にもお出で下さい。^尾
- (五)弟等は小山の上で友達と樂しげに遊んでゐます。^尾

第五篇 文章

第一章 文の成分

○意義 本書の第一篇の總説に述べたやうに、文は幾つかの單語を集めて、一つの纏つた思想を表してゐるものである。それゆゑに文を組成してゐるものは、各種の單語であるが、その單語が思想發表の際に如何なる職分をするかを知る必要がある。その職分の上から、文を幾種類かに分けることが出来る。これが文の成分である。

○文の成分の意義 文を成し上げてゐる分子といふ意である。即ち文の成分とは職分の上から考察して、文を組み立ててゐる分子といふことである。

第一節 主語 述語

○意義 主語とは、「何が」「何が」のやうに、一文の主たる題目となる語といふ意である。

○意義 述語とは、「かうする」「このやうである」のやうに主語について、或事柄を述べる語といふ意である。又之を或事項を説明する意で、説明語ともいふのである。

○構成の品詞 主語は主として名詞・代名詞より成り、それに「は」「が」「も」等の助詞を添へることもあり、述語は主として動詞・形容詞より成り、又は用言・體言に助動詞の附いた

た連語より成つてゐるものもある。

第二節 客語 補語

○意義 客語とは、客分として入つて、文意を助ける語といふ意である。

○意義 補語とは、文語・述語・客語の外で、文意を全くするために補ひ入れる語といふ意である。

○構成の品詞 客語・補語は、名詞又は代名詞より成り、主として客語には、通常「を」「を」を、補語には、通常「に」「と」「の」等の助詞を添へるものが多い。

第三節 修飾語

○意義 修飾語とは、各所屬の語を修飾する語といふ意である。

○構成の品詞 主語・客語・補語の修飾語は、動詞・形容詞・助動詞の連體形、又は「の」「が」を伴へる名詞・代名詞等で、述語の修飾語は主として副詞である。

○種類 「澄む月」の如く、體言を修飾する語を形容詞的修飾語といひ、「風清く吹く」又「月湛み美し」の如く、用言を修飾する語を副詞的修飾語といふのである。

第四節 文主

以上は通常の文に用ひられる成分であるが、以下は特殊の文に用ひられる特殊成分である。

○意義 文主とは、主語・述語を具へてゐる文を主宰する意

である。又主語の上にあるから、總主語ともいふのである。
○構成の品詞 文主となる成分は、主語と同じく、主として名詞・代名詞である。

第五節 獨立語

○意義 獨立語とは、文の主要部より獨立してゐる語といふ意である。

○構成の品詞 獨立語は主として接續詞又は感動詞である。

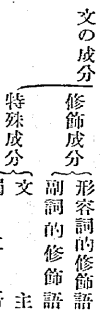
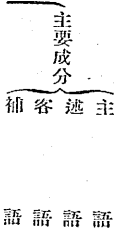
○種類 左の類例も獨立語の一種として取扱つても宜しい。

- (一)大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す。(大日本帝國憲法第一章第一條)
- (二)さあ兄さん學校に行きませう。(提示語ある文)

以上の(一)例の文の「大日本帝國は」は、人をして特別の注意を拂はせるために、普通の位置より取出して、該位置には相當する代名詞を置き、特に提示するものであつて、此等を提示語といつてゐるものもあるが、複雑とならぬやうに、此等も獨立語として取扱つて宜しいと思ふ。

文の成分の總括

以上の文の成分の種類を表示すれば左の通りである。



○練習

○記憶を正確にするために、文の成分の種類を言はせるのである。

○左の文中の成分の種類は附記の通りである。

- (一) 日本人は愛國心に富む。
主語 補語 述語
- (二) 目は物を見、耳は聲を聞く。
主語 客語 主語 客語 述語
- (三) 不忍池、詩人は之を小西湖といふ。
獨立語 主語 客語 修飾語 述語
- (四) 健全なる精神は、健康なる身體に宿る。
修飾語 主語 修飾語 補語 述語
- (五) 應援の聲は國民の熱誠が籠つてゐる。
修飾語 主語 修飾語 修飾語 述語

第二章 文の成分の位置

○意義 文の成分は、之を排列するに、大體一定の順序があつて、その順序に據らなければ、文意を混亂する恐がある。その成分の位置については、左の三種の方面より考察することが出来る。

第一類 文の正叙法

- 一 名文は讀者に感動を與ふ。
主語 補語 客語 述語
 - 二 父は種々の書物を高き机に載す。
主語 修飾語 客語 修飾語 述語
 - 三 日本は氣候溫和なり。
文主 主語 述語
 - 四 おやあなたも亦弟さんも來ましたね。
獨 主語 獨 主語 述語
- 説明 以上の例の如く、主語は文の首位に、述語は文の末位に、客語・補語は主語と述語との中間に、修飾語は修飾する語の上位に、文主は主語の上位に、獨立語は文の首位又は語句の中間にあるものが、正期の文であつて、此等の位置に叙述する方法を文の正叙法といふのである。

第二類 文の倒叙法

- 一 美なるかな山河の景。
述語 主語
 - 二 掘り出したり金の茶釜を。
述語 修飾語 客語
 - 三 賞品を校長が贈與した。
客語 主語 述語
- 説明 以上の例の如く、文の成分は、文の語調を整へたり、文中の語勢を強めたりするために、その成分の位置を轉倒することあるが、これを文の倒叙法といふのである。

第三類 文の略叙法

- 一 (我は)明日貴君を訪問せむ。
主語
 - 二 千里の路も一步より(始る)。
客語
 - 三 私は(理由を)知つてゐる。
主語
 - 四 疑あらば(私に)問ひなさい。
補語
- 説明 以上の例の如く、文の成分は、思想の明瞭と確實とを失はない範圍にあつては、文を簡單な形式で済まさうとか、語調や語勢をよくしようとかの目的で、或成分を省略することがあつて、これを文の省略法といふのである。
- 練習
- 一 左の文中にある成分の倒叙法と省略法とを左に記す。
(一)祝へ諸人 もろともじ。……………(倒叙法)
 - (二)仰げば 高し 吾が師の恩。……………(右に同じ)
 - (三)人は(我を)誦るとも我は(人を)答めず。……………(略叙法)
 - (四)論より證據(なり)。……………(右に同じ)
 - (五)(人々)は(道路の左側を)通行せよ。……………(右に同じ)

第三章 文の句及び節

第一節 文の句

- 一 香のよきは梅の花なり。
(名詞句を含んだ文)
- 二 月の照る夜は快し。
(形容詞句を含んだ文)
- 三 水清ければ川魚見ゆ。
(副詞句を含んだ文)

○説明 右の文中「香のよき」「月の照る」「水清ければ」には、何れも主語と述語とを具へた一種の文である。然るに、前例の如くに用ひられては、各獨立した文ではなくて、他の文中に含まれた一部分となつたのである。そのやうに、他の文中の一部分となつたものを、その文中の句といふのである。さうしてその一の如く、名詞の用をなすものを名詞句といひ、二の如く、形容詞の用をなすものを形容詞句といひ、三の如く、副詞の用をなすものを副詞句といふのである。

第二節 文の節

- 一 梅の花はわが家の庭に咲く。
(獨立の文)
- 二 鶯は梅の枝に來て囀る。
(右に同じ)
- 三 梅の花は家の庭に咲き、鶯は梅の枝に來て囀る。
(節の文)

○説明 以上の例の一と二とは、何れも完全な獨立の文であるが、三の如く、二文を重ねて一文とすれば、又一節の完全な文となつて、上下の各部分がそれぞれ、同等の資格で對立す

るものとなる。この各の部分はその文の節といふのである。

○練習 左の文中の句と節とは次の通りである。

- (一) 前車の轍るは後車の戒なり。
(名詞句)
- (二) 能ある鷹は爪をかくす。
(形容詞句)
- (三) 水は方圓の器に従ひ、人は善惡の友に因る。
(副詞句)
- (四) 氣候が寒いけれども、今は春の氣分である。
(形容詞句)
- (五) 多くの花咲く春は甚だ面白い。

第四章 文の係結

(一) 目的 文の係結は我が國の語法の特徴であり、國語讀本中にも澤山用例があるから、之を正確に説くが肝要である。

(二) 注意 文の係結は文語の用法にあるもので、口語には此等の用法がないのである。

- (三) 要項 係結は左の如くに説けば明瞭である。
 - 一 係結の語なければ、左の如く終止形で結ぶが定期である。
 - 二 一家榮ゆ 「榮ゆ」は動詞、下二段活用形の終止形。
 - 三 かの山高し 「高し」は形容詞、く活用形の終止形。
- 注意 本来諸種の語は終止形で結ぶが當然の定期であるから、之を係結として説く必要もないが、之を出發點として、

對照的に説明するが便宜である。

第一類 そなむやかの係結

- (一) 二 ぞなむやかの係語があれば、連體形で結ぶが定期である。
 - 一 家ぞ榮ゆ 「榮ゆ」は動詞、下二段活用形の連體形。
 - 二 かの山高む高き 「高き」は形容詞、く活用形の連體形。
 - 三 月や出でたる 「たる」は助動詞、完了の連體形。
 - 四 誰か行きし 「し」は助動詞、過去の連體形。

第二類 こその係結

- (一) 三 こそその係語があれば、已然形で結ぶが定期である。
 - 五 家こそ榮ゆれ 「榮ゆれ」は動詞、下二段活用形の已然形。
 - 六 かの山こそ高けれ 「高けれ」は形容詞、く活用形の已然形。

○練習 一 文中の「は」は係語、「は」は結語である。

- (一) これぞ神國の神國たる所以なる。
- (二) 民をおぼしめす御心に大御衣やぬがせ給ひし。
- (三) 友どちなむ別れがたく思ひて訪ひ來ける。
- (四) あの木をば大納言殿みづからこそ植ゑ給ひしが。
- (五) わればかりかく思ふにや。下にあらむの結語を略してゐる。

- 二 係結の誤は()内の通りに正すのである。
 - (一) べし (べき、可能の助動詞の連體形)
 - (二) なりぬ (なりぬる、完了の助動詞の連體形)

(三) たれ (額みたり、完了の助動詞の連體形)

○備考 上のごその係語は下に略した「よけれ」で結んだもので、下のたれで結んだものでない。

- (四) べし (べき、可能の助動詞の連體形)
 - (五) まさる (まさる、行四段活用形の已然形) めれ (めり、推量の助動詞の終止形)
- 備考 こそは下のまされで結び、めれで結んだのでない。

第五章 文の呼應

- 一 明日若し天氣好くば余も行かむ。(假定の呼應)
- 二 今聞ゆるは鐘の音なり。(確定の呼應)
- 三 それ何かは難からむ。(反語の呼應)
- 四 どうしてそんな事があらうか。(右に同じ)

○説明 一文中の上下の語句を相應せしめて、文章の意味を整理することを文の呼應といふのである。この方法は文章の構成上極めて大切である。その種類は、假定の呼應、確定の呼應、反語の呼應、或は自他の呼應時の呼應等種々あるが、大體成るべく複雑に涉らぬやうに説明するがよいと思ふ。

- 練習 一 左の文中の呼應は次の通りである。
 - (一) 若し知らざらば我に問へ。(假定)
 - (二) 宜しく時に及びて勉勵すべし。(當然)

○類例 思ふに今年も豊作なるべし。
推量 過去
 四昔の人はその心すなほなりき。
過去 反語
 五學生たる者、豈勉勵せざるべけむや。
反語
 二 左の文中の誤は附記の通りである。
反語
 一 若し成功すれば大いなる名譽なり。
推量 假定
 二たとひ雨降るとも明日は出發す。
推量 假定
 三妾に入場を禁す。
動詞 入場する
 四思はざりき此の如き好結果あり。
あらむとは 疑問
 五恐らくはこの説に反對する人なし。
なからむ 推量

第六章 文の構造上の種類

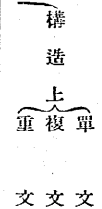
文はその構造上から見ては左の三種に分けることが出来る。

- 第一類 單文
 一 風清し。父母の恩は山よりも高し。
主 述
 ○説明 以上の文例は主語と述語との關係が、唯一回成立してゐるばかりの文である。此等の文を單文といふのである。

○類例 父財産を子に譲る。父も母も喜びたり。
主 述 主 述
 楠木正行は忠臣にて孝子なり。
主 述
 竹の幹は圓くして長し。
主 述
 第二類 複文
 一 天氣晴れたれども波高し。
主 述 主 述
 二 我は終日父の歸るを待てり。
主 述
 ○説明 以上の文例は文中に副詞句を含み、主語と述語との關係が、二回成立してゐる文である。このやうにその關係の二回以上成立してゐる文を複文といふのである。
 ○類例 花の咲きたる園多し。
主 述
 彼は手の舞ふ程喜びぬ。
主 述
 第三類 重文
 一 空晴れ月出づ。病は口より入り、禍は口より出づ。
主 述 主 述 主 述
 ○説明 以上の文例は二つの節より成立してゐる文である。このやうに二つ以上の節より成立してゐる文を重文といふのである。

○類例 目は物を見、耳は聲を聞く。
節 節
 雨降り、風吹き、雷さへ加りぬ。
節 節 節
 第七章 文の性質上の種類
 第一類 平叙文
 一 君は君たり、臣は臣たり。
(断定の文)
 二 近日の中に花も咲き始めよう。
(推量の文)
 右の例の如く、事實をありのままに述べる文を平叙文といふ。この種の文には肯定・否定・断定・推量・現在・過去・未來・完了等種々あつて範圍が廣い。
 ○類例 富士の山かすかに見ゆ。
(肯定の文)
 春は來れども、花は咲かず。
(否定の文)
 第二類 疑問文
 一 雲のいづこに月宿ららむ。
(疑問の文)
 二 どうして黙つて居られよう。
(反語の文)
 右の例の如く疑問又は反語の意を表す文を疑問文といふ。この種の文は勿論疑問の語を入れて表すことが通例である。
 ○類例 如何なる故かありけむ。
 君は何處へ行きますか。
 第三類 命令文

一 朝は早く起きよ。
(命令の文)
 二 わるい女とは遊ぶな。
(禁止の文)
 右の例の如く、命令又は禁止の意を表す文を命令文といふ。この種の文は活用言の命令形を用ひ、又は命令の意の「べし」又は禁止の意の助動詞の「べからず」、助詞の「な」「な……ぞ」等を用ひて表すのである。
 ○類例 學生はよく學べ、又よく遊べ。
無用の者この室に入るべからず。
 第四類 感歎文
 一 あい我が國の軍士は勇なるかな。
(感歎の文)
 二 やあよく盡力してくれた。
(右に同じ)
 右の例の如く、感歎の意を表す文を感歎文といふ。この種の文は、感動詞を用ひるか、或は感歎の意の助動詞又は助詞を用ひて表すのである。
 ○類例 あはれうれしきかも。
 まあ強い風が吹きましたね。
 ○文の種類の種類
 以上文の種類を表示すれば左の通りである。



文の種類
 性質上疑問文
 感歎文

○練習 左の文を構造上及び性質上より、その種類を言へば、次の通りである。

- (一)一寸の光陰も輕んずべからず。……………單文：命令文
- (二)嗚呼熱誠なるかな日本國民。……………單文：感歎文
- (三)此の如き名文は何處にあるか。……………單文：疑問文
- (四)人も學びて後にこそまことの徳はあらはるれ。……………複文：平叙文
- (五)用が出来たら(私は)手紙を送りませう。……………複文：平叙文

第八章 文章の總括

○練習 一 文中の―は成分、附記はその成分の名である。

- (一)頼山陽先生は通稱を久太郎といへり。修飾語は述語を修飾した。
- (二)清少納言よ。香煙室の雪はいかならむ。修飾語は主語を修飾した。

上級 新日本文法教授提要 終

- (三)何事^主にても勉むれば、後^修には成就すべし。修飾語は述語を修飾した。
 - (四)あゝ花の咲いた木の下に、人が大勢集つて居る。上の修飾語は補語を、下の修飾語は述語を修飾した。
 - (五)最早人が集つた。それでも懇談會は始らない。修飾語は主語を修飾した。
- 二 文中の―は何と節とで、附記は何の名である。
- (一)余は身體に元氣の充つるを覺ゆ。
 - (二)春は花をめで、秋は紅葉をあはれむ。
 - (三)大座の將に櫻むとするは、一木のよく支ふる所にあり。
 - (四)無理が通れば道理引込む。
 - (五)頭腦のよい人は一生の利益である。

昭和九年三月十五日印刷
昭和九年三月十八日發行

別行

上級 新日本文法教授提要

非賣品

東京市澁谷區幡ヶ谷本町一丁目十番地

著者 佐藤正範

東京市神田區神保町二丁目十番地

發行者 來島正時

東京市神田區錦町三丁目十一番地

印刷者 小笠原秀雄

所有權著作

發行所

東京市神田區神保町二丁目十番地
振替口座東京二一六九一〇番
電話九段一三一〇番
電信略號(ヤマウ)

山海堂出版部

